ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第111号 2024年3月15日

編集・発行『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 内地研究を終えて―京都大学での10カ月	加藤善子	2
コラム 大谷グローブはみんなが知っている学校資料!?	八田 友和	3
逸話と世評で綴る女子教育史（111） －宝塚少女歌劇団の学校－	神辺 靖光	8
都新聞にみる「相談の相談」欄の掲載記事から － 矢﨑千華さん（関東学院大学講師）の研究に触発されて －	谷本 宗生	12
大正時代の女子高等教育（66） マダム・バーグマンと人見絹枝	長本 裕子	14
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書 （35）：『鳥取県公報』にみる鳥取県立高等学校の専攻科（9）	吉野 剛弘	20
旧制灘中学の教育目標と生徒の活動（7）	冨岡 勝	23
体験的文献紹介(60) 大久保利謙博士・多賀秋五郎博士との邂逅（かいこう）（その2）	神辺 靖光	26
書 評 井上義和・加藤善子 編著『深志の自治 —— 地方公立伝統校の危機と挑戦』	津田 壮章	32
刊行要項（2015年6月15日現在）		38
短評・文献紹介		39
会員消息		40

コラム

内地研究を終えて
―京都大学での10カ月―

加藤（かとう） 善子（よしこ）
（信州大学 ）

2023年5月1日から2024年2月29日まで、京都大学大学院人間・環境学研究科の石岡学先生の研究室で内地研究員として過ごしました。

院生だったころのように、じっくりと腰を据え、何もかも忘れて研究に没頭…というわけにはやはりいきませんでしたが、優秀な大学院生・学部生に交じってゼミに参加し、議論したり、院生室に机と本棚を一本かりて、自分の研究分野に近いところにいる先生や院生と一緒に過ごすことで、研究する感覚、問いを追及するあの感覚が、身体によみがえってきました。

何よりも幸せだったのは、充実した図書館です。文献を読みながら、「あ、この本を読んでおかねばならないな」「この論文は確認しておかないと」と思って検索をすると、キャンパス内のどこかの図書館に必ずあるのです。散歩がてら、すぐに図書館に出向いてその場で読むことができ、必要ならば借りてくることもできます。文献にアクセスできずに研究が中断されることがまったくなく、加速度的に進んでいきます。文献への圧倒的なアクセスが、京大の先生方の研究力を支えているのだなと実感し、心底うらやましく思いました。研究室棟の隣にあった吉田南総合図書館は三高の図書館が前身で、三高生活やその時代の空気を想像したりして、夢見心地で書架の間を歩きました。この図書館から離れ難く、最終日の夜7時すぎまで、図書館でお世話になりました。

また、研究会にも出席し、いろいろな研究者と知り合うこともできました。研究者ネットワークを持ち、定期的に交流すると、新しい研究の情報がどんどん入ってきます。本を読んでも、その著者を知っていると、より理解することもできますし、会った時に質問をすることもでき、ひとりぼっちで研究していたらそりゃついていけないよな…と思い至りました。

今、石岡研から戻ってきた荷物をひとつずつ解きながら、論文を書き上げるべく頭をフル回転させています。この感覚を忘れたくありません。研究への強い心を持って、研究時間を確保し、問いを手放さずにいたいと思います。

コラム

大谷グローブはみんなが知っている学校資料!?

はった ともかず
八田 友和
（クラーク記念国際高等学校）

1. はじめに

メジャーリーグで活躍する大谷翔平選手が、全国の小学校にグローブ（以下、「大谷グローブ」と表記する）を寄贈した。日本を代表するスーパースターからの贈り物に対し、テレビや SNS では連日、大谷グローブを使う小学生の姿が取り上げられている。

ニュースを見ていてふと感じたのだが、この大谷グローブこそ誰もが知る学校資料といえるのではないだろうか。

そこで本稿では、寄贈された大谷グローブがどのように利用・活用されているかを取り上げ、学校資料そのものの可能性や活用方法について考えたい。

2. 学校資料としての大谷グローブ

大谷グローブは、「積極的な利用・活用を前提とした学校資料」といえる。事実、大谷グローブを市役所に展示した某自治体の市長に対して、「趣旨が異なる」「おかしい!」など、批判が殺到していることからも明らかである。また、盛山正仁文部科学大臣も、学校現場での使い方に関して「大谷選手の気持ちを踏まえた上で、各学校で判断して活用してもらえればいいのではないか」と話していることからも、「学校現場における利用・活用」が前提であり、その方法は各学校に委ねられていることがわかる。

また、大谷翔平選手からのメッセージを確認すると、大谷グローブは、①学校に対しての寄贈であること、②「お互いに共有し、野球を楽しんでもらうため」「野球しようぜ!」といった表現から、グローブの利用・活用を求めていることが読み取れる。以下、大谷翔平選手からのメッセージを全文転載する。

学校関係者各位

貴校ますますご清栄の事とお慶び申し上げます。
ロサンジェルス・エンゼルス・オブ・アナハイムのメジャーリーガー、大谷翔平です。
この手紙は、このたび私が学校に通う子供たちが野球に興味を持ってもらうために立ち上げたプログラムをご紹介するためのものです。

この3つの野球グローブは学校への寄付となります。
それ以上に私はこのグローブが、私たちの次の世代に夢を与え、勇気づけるためのシンボルとなることを望んでいます。それは、野球こそが、私が充実した人生を送る機会を与えてくれたスポーツだからです。

このグローブを学校でお互いに共有し、野球を楽しんでもらうために、私からのこの個人的なメッセージを学校の生徒たちに伝えていただければ幸いです。

この機会に、グローブの寄贈をさせていただけることに感謝いたします。
貴校の益々のご発展をお祈り申し上げます。

野球しようぜ。

大谷翔平

（出典）桑名市「大谷翔平選手によるグローブの寄贈について」（2024 年 2 月 24 日確認）に掲載された大谷選手のメッセージから全文引用。
https://www.city.kuwana.lg.jp/gakko/ohtani_glove.html

3. 大谷グローブの活用事例

ここでは、寄贈された大谷グローブがどのように利用・活用されているかについて、Web サイト上に掲載された情報を複数取り上げ紹介する。

○ 鹿児島県志布志市・曽於市の小学校の取り組み（鹿児島県）

伊崎田小学校の校長が中心となり「守る人みんな、大谷翔平グローブで野球しようぜ!」プロジェクトを実施。近隣小学校に声をかけ、4校12個のグローブを集め、1週間交代で各学校の授業や休み時間に活用することになった。
【参考サイト】
「学校の垣根越え 大谷グローブを持ちよりみんなで「野球しようぜ!」鹿児島でプロジェクト実現」（2024 年 2 月 24 日確認）

https://news.yahoo.co.jp/articles/4a78150b64e7ce7712c139a70a7098dddf13bc3d

○ 横浜市青葉区で高校生が野球教室開催（神奈川県）

大谷グローブを活用し、横浜市青葉区で高校生が小学生向けに野球教室を開催。教員に野球経験者がいないなど、うまく活用できない小学校に対し、地元の高校の協力を得て、横浜市青葉区で野球教室を運営する会社が企画した。2 月 21 日（水）には、県立高校の野球部 35 人が、近隣の小学校を訪問し、野球教室を開催している。

【参考サイト】

「大谷グローブ」で連携プレー　高校野球部が小学校で野球教室（2024 年 2 月 24 日確認）

https://news.yahoo.co.jp/articles/1e4860f6deaedb15f806579baace52e8dd2770dd

○ 野球指導者が野球教室を企画（宮城県）

全国の 1987 年生まれの野球指導者で結成された「昭和 62 年会」が少年野球チームと野球未経験の子どもを対象に野球教室を開催。大谷グローブを活用した「キャッチボール教室」などの企画を通して、野球の魅力を伝えていく模様。

【参考サイト】

「1987 年生まれの野球指導者による「昭和 62 年会」が野球教室「大谷グローブ活用」も企画」（2024 年 2 月 24 日確認）

https://news.yahoo.co.jp/articles/a6ccee69e9916bd21ed3be3a48020923df2559c7

○ 児童にアンケートをとって活用方法を検討（宮崎県）

宮崎市のとある小学校では、「大谷グローブ」をどのように活用するか、児童にアンケートを実施。100 通近く寄せられた意見を踏まえ、昼休みの時間に学年ごとに使うことが決定した。アンケートには、「学校の家宝にしたい」や「大谷選手とキャッチボールをしたい」という意見もあったとのこと。

【参考サイト】

「「かほうにしてほしい」“野球しようぜ!” 大谷翔平選手から贈られたグローブ 活用広がる」（2024 年 2 月 24 日確認）

https://news.yahoo.co.jp/articles/2f118ee3326af0ac10ee0217113442b805344f0b

○ 英語でお礼の手紙を作成（福岡県）

福岡県宗像市の離島の小学校では、大谷翔平選手に感謝の気持ちを伝えるため、英語でお礼の手紙を作成している。同校では、大谷選手に向けてグローブの御礼を伝える動画も作成しており、その動画とともに手紙を郵送する予定。

【参考サイト】

「“大谷グローブ”が人口 130 人の離島にも届いた！児童7人の小学校 英語でお礼の手紙 福岡・宗像市」（2024 年 2 月 24 日確認）

https://news.yahoo.co.jp/articles/80e14e51d7737ffce9e92a4fe5a0385a9fb94adf

○ 東広島市 33 の小学校 11000 人が感謝のメッセージを巻物に！（広島県）

東広島市 33 校の小学生約 11000 人から感謝や応援のメッセージなどを集め、巻物を作成。東広島市教育委員会は巻物を大谷選手に届けるために調整している。

【参考サイト】

「“大谷グローブ”11000 人が感謝のメッセージを巻物に 東広島市 33 の小学校」（2024 年 2 月 24 日確認）

https://news.yahoo.co.jp/articles/cc9a9edcd9555a72dd6d9adb180e5e9bbd836dd5

今回取り上げた複数の実践から、学校資料の活用方法は「無数」にあることを再確認した。また、野球教室の事例など、大谷グローブを介して、様々な関係・繋がりが生まれていることにも注目したい。

大谷グローブの活用を考えることは、その他の学校資料の活用に光をあて、模索するきっかけになると感じている。これを機に、学校資料の活用方法を検討するワークショップやイベントを定期的に開催することが目指される。教育関係者だ

けでなく、多くの人に広く活用の意見を募り、学校資料の活用を考える機会を創出することが重要になるだろう。

4. さいごに

本稿では、誰もが知る学校資料として大谷グローブを取り上げ、実践を複数紹介してきた。私も本ニューズレターで学校資料の活用をテーマに連載を行ったことがあるため、現職教員のなかでは比較的、学校資料の活用に関して考えてきた方だと感じている。しかし、今回の大谷グローブの活用方法はまさに目からウロコな実践ばかりである。多くの人が注目し、知恵を出し合ったからこそ生まれた活用方法や子どもや大人が本気になったからこそ実現したプランなど、目を見張るものばかりであった。大谷グローブの利用・活用の次は、各学校にある資料が活用される番ではないだろうか。大谷グローブを皮切りに、各地の学校資料が活用されることを切に願う。

（学校資料の保存・活用にあたっては、学校資料研究会（編）『学校資料 Q&A』を参照いただき、より充実したものとしていただきたい。）

【参考文献】

・産経新聞「「子どもたちの夢につながる」盛山文科相が謝意 大谷選手のグラブ寄贈」（2024 年 2 月 24 日確認）
https://www.sankei.com/article/20231114-PAS4W263L5N6NJJN45ZZWRY5QI/
・学校資料研究会（編）『学校資料 Q&A』学校資料研究会，2023 年

逸話と世評で綴る女子教育史（111）

―宝塚少女歌劇団の学校―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

本誌108号の女子教育史―レビューと映像時代の開幕―に昭和2年9月、武庫川沿いの宝塚劇場で少女歌劇団による“レビューモンパリ”が初めて上演されたことを書いたが、今回再び宝塚少女歌劇団とその養成学校のことを書こうと思う。少女歌劇団の生みの親、育ての親は小林一三（いちぞう）である。まず小林一三の人柄から紹介しよう。

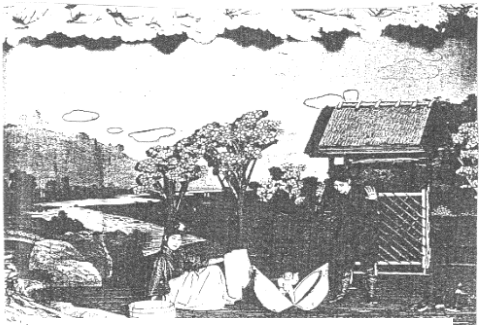
図A　小林一三

小林一三は1873（明治6）年、山梨県の生れ、慶應義塾卒業後、三井銀行に就職したが明治39年辞職、有馬電鉄（阪神急行の前身）を創立して専務取締役となり、沿線の住宅地を開発する不動産事業をはじめ、その住民のための日本最初のターミナルデパート阪急百貨店をつくった。そしてまた電鉄沿線住民の憩いの場として宝塚温泉を開発し、さらに沿線住民に健全な娯楽を提供しようと宝塚少女歌劇団をはじめたのである。

少女歌劇を始めるに当たって小林は東京の三越デパートをはじめ各デパートがはじめた客寄せのための少年音楽隊（鼓笛隊）を真似たと言われている。昭和のはじめ頃まで続いたことだが街には時々角兵衛獅子（かくべえじし）などという子どもの門付（かどづ）け芸人が訪れて逆立（さかだ）ちやとんぼ返りを見せて銭（ぜに）をねだることがあった。必ず太鼓をたたきながら気合を入れる親方がいた。人相が悪いその親方が実は人さらいで角兵衛獅子が受け取る銭を分取るのだと言われていた。見物の子どもたちはみなそれを信じていたからいつでも逃げ出せる用

意をしながら見ていたのである。それに比べてデパート客寄せの少年音楽隊の明るさよ。大正昭和初期の明朗さが一回でわかる光景であった。宝塚少女歌劇の明るさと同じで旧来のどこか陰湿な花柳界のお座敷芸能をかなぐり捨てた明朗で清純なものであった。

大正３年４月１日から宝塚少女歌劇団の第一回講演が宝塚のパラダイス劇場で開幕した。演(だ)し物は無邪気な歌劇「ドンブラコ」４章（桃太郎の鬼退治）である。出演者は最高16歳のお婆さん役から最低12歳の猿と雉(きじ)役の少女たちである。幼稚といえばそれまでだが外題(げだい)の「ドンブラコ」は桃太郎の昔話しで“大きな桃がドンブラコドンブラコと流れてきました”という口上をそのままとったのである。ここまで幼稚で真っ当な話になれば文句のつけようがない。しかるにこの幼稚な芝居を支える舞台装置や衣装、照明、音楽の豪華さはどうだろう。パリをはじめ欧州最高の技術を駆使しての絢爛(けんらん)たるものであった。



図Ｂ　ドンブラコの場面

「ドンブラコ」の成功に気を良くし、第２回は「浦島太郎」、第３回は「紅葉狩」以後、「大江山」「一寸法師」「浦島太郎」「舌切雀」「猿蟹合戦」「花咲爺」「文福茶釜」など昔話や童話を題材にした演(だ)し物が続き、宝塚劇場だけでなく東京進出も企て大正７年５月の帝国劇場での公演を大成功裏におさめ、文字通り、日本の舞台芸術に少女歌劇という新しいジャンルを打ち立てたのである。

「清く正しく美しく」というのが宝塚少女歌劇のモットー（合言葉）である。十代の少女たちが集まる標語としてありきたりのように思われるが、これは小林一三にとって人生をかけた闘いであった。小林は日本の芝居や歌舞伎界

に根を張る花柳界の雰囲気やその浸透を徹頭徹尾嫌ったのである。彼の「語録」にはしばしば花柳界を攻撃する言辞がある。三味線音曲も花柳界に関連するから嫌いで卑猥と写る。これからの演劇や音楽、舞踊は国民本位、家庭本位でなければならぬとする。そこで宝塚の少女歌劇は花柳界やそれを象徴する三味線音楽と絶縁し、すべからく西洋音楽、西洋舞踊に範をとらねばならぬとする。時はまさに表向き封建性を倒したものの生活の中にしみ込んだ封建制を徐々に剥離(はくり)し、市民社会に突入しようとする大正初年である。小林の言辞は宝塚の開幕にふさわしい思想と思う。よって宝塚少女歌劇は頑(かたく)なに三味線音楽、御座敷舞踊に近づかなかった。直接パリーのレビュウに学ぶか東京帝国劇場で旗揚げしたローシーらの歌劇から知恵を借りるかであった。

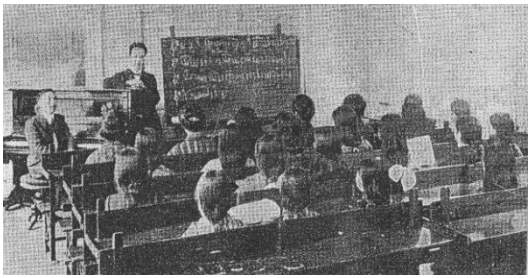
私（神辺）は学生の頃から歌舞伎や新派芝居の愛好者になり、封建社会の義理人情にふれながら涙したり喜んだりしてきたが、小林一三にとって花柳界や封建社会は許し難い虚偽の世界であったのだろう。宝塚の少女たちに託す単純明快な「清く正しく美しく」は彼の真情であっただろう。彼のこの願いは観客動員に表れている。“家族みんなで楽しめる”少女歌劇であった。これには主婦も兄弟姉妹もみなはいる。第二次大戦をはさんで戦前、戦中、戦後しばらくまで歌舞伎座や新派の明治座など、夫妻並んでの観劇などめったになかった。桟敷に居並ぶ面々はそれとわかる旦那衆と連れの芸者で良家の奥様は夫婦で芝居見物などしなかったのである。小林一三はこうした風潮をけがらわしく思い、家族みんなでの観劇を発起したのである。当然ながら女性観客がふえる。それが新しい時代、大正の空気にマッチして新しい風俗をつくる。まことに宝塚歌劇少女歌劇は自由な大正期の申し子のようであった。

小林はこれを阪神地帯のみならず東京に拠点を設けようとした。帝国劇場での少女歌劇の成功を機に丸の内有楽街にショッピングセンターを兼ねた

アミューズメントセンターを展開したのである。これも明るい大正時代の開幕の気運にマッチして盛大に向った。

宝塚少女歌劇団は当初から宝塚音楽学校とも名乗っていた。初演の“ドンブラコ”出演者は最高16歳、最低12歳である。本誌上で述べてきた如く、女子の小学校就学率は明治末期に90%を超え、大正期に這入ると高等女学校への進学が急上昇しはじめたのである。高等小学校に籍を置く者も多い。花柳界をはじめ、裏社会の嫌いな小林一三が歌劇団の少女たちを旅芸人の小娘同様に扱うはずがない。彼の近代的矜持が許さない。当然、高等女学校と同等の学校生徒としたいがそのようなカリキュラムを持たないから格式が同等と思われる音楽学校を名乗らせた。学習・稽古の主なるものはダンス・舞踊と音楽と国語、英語であった。ダンス・舞踊の教授は同歌劇団の振付師、久松一声であった。こうして宝塚少女歌劇団・宝塚音楽学校は大正期から昭和にかけて少女たちの心をとらえ生々発展してゆくのであった。

図C　群舞の稽古



図D　英語の授業

参考文献
伊井春樹『小林一三は宝塚少女歌劇団にどのような夢を託したか』
小竹哲『宝塚少女歌劇・はじまりの夢』
南博『大正文化』
国際文化情報社『画報近代百年史・第10巻』

都新聞にみる「相談の相談」欄の掲載記事から

― 矢﨑千華さん（関東学院大学講師）の研究に触発されて ―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

『東京新聞』の前身にあたる、『都新聞』に1906（明治39）年12月から、「相談の相談」という身の上相談の連載欄が開始された・・と知られる。それが、専門研究者である矢﨑千華さん（関東学院大学講師）の知見によれば、日本の新聞紙面での初の試みであったと称している。当時の回答者は、今のような専門家というよりも新聞社の記者が担当し、郵便だけでなく、直接の体面での相談も受け付け、担当の係員らが相談の応接に忙殺されたといわれ、開始の一年間だけでも600件をこえる相談が掲載されているほどであった（矢﨑千華さん「東京新聞　人生相談　新聞初の人生相談」『東京新聞』2024年3月2日）。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊

「**清い生活が望**　私は両親を失い一人の姉あるばかりの心細い身の上ですが、以前は相応の家庭に生まれましたけれども、商業の手違いから一家逆境に落ち、それを救おうと自ら進んで芸妓になりました。[中略] 四年前に廃業しましたにつけ、[中略] 土地を見立てて家を借りようとすると、旦那はあるか亭主はあるかと尋ねますから、独身ですと答えますと、なぜか貸してはくれません。グズグズしている内に追々身が詰まって来ますので、人に相談すると、花柳界の景気がいいからもう一度芸妓になれの、待合を出せの、朝鮮へ行けのとか申します。[中略] 生意気のようですが、語学を研究して女中ともなり洋行するとか、ただし音楽のような美しいことに携わって、独身生活を続けたくも思います。どうしたらよろしゅうございましょうか（女性）　**答**　二度と再び泥の中へ足を踏み込まぬというご決心は、いか

なる場合たりとも翻さぬようになさい。かくしてこそ、いったん蘇えったあなたの新しい生命を維持することができるのです。語学の研究をして洋行するのもなし得られない業ではありませんが、前途に困難あることを思わねばなりません。音楽の趣味を持っていなさるなら、このほうで身を立てた方が近道ではありますまいか。なおご勘考をなさいませ」（1906年12月22日掲載記事）

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊

欧米列強諸国を意識して、明治日本もいち早く近代化を進めるべく教育の普及充実を目指し、人びとの読み書きの能力も全体的に向上していき、印刷・郵便網も制度化されていくなかで、新聞・雑誌などの活字文化も読者層の形成を受けていっそう栄えたものといえよう。矢﨑さんによれば、「相談の相談」に寄せられた悩みも、切々と身の上の不幸を訴えるものから、病気の治療法や法律・訴訟問題など多岐にわたり、「人にはそれぞれの人生、悩み、紆余曲折があることが可視化された」として、「相談の相談」は「社会で暮らしを営む人びとの物語が見られる貴重な存在」と指摘し、たいへん興味深いと強調している。

矢﨑さんによれば、「身の上」相談を公の場であえて相談することで、人生にはそれぞれ相応の悩みも含めた事情が多々あり、「自力では解決できないことを自分で証明しているようにも見える」とし、相談というかたちでありながら、むしろ自分を主人公とした「物語」を紙面上で執筆できたことに、投稿者には相応の「喜び」もあったのではないか・・と、鋭い分析も示しているところである。

大正時代の女子高等教育（66）

マダム・バーグマンと人見絹枝

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

二階堂トクヨに影響を与えた人―マダム・バーグマン―

マルチナ・バーグマン＝オスターバーグは、トクヨが留学したイギリスのキングスフィールド・カレッジの創立者で、校長であった。その創立者の名前からマダム・オスターバーグ体操専門学校ともいわれ、ロンドンの郊外ダートフォードにあった。トクヨの上司永井道明が明治38（1905）年から42（1909）年まで文部省の外国留学生として欧米の体育視察に出かけた際に、マダム・バーグマンと知り合いになった。永井の紹介で二階堂トクヨは33歳で留学したが、マダムは64歳で、引退の準備を始めており、あまり授業をしていなかった。そのためトクヨが直接教わったのは、実地教授法だけであったが、マダムの人格や考え方などに多大な影響を受け、終生尊敬した。

マルチナ・バーグマン
（『二階堂学園 90 年
― 学園は今 ―』）

マダムは1849年10月、スウェーデンのスコーネで生まれた。28歳の時、医療とマッサージを含む体操を習得するためにスイス・ドイツ・イギリス・フランスに渡る。1879年30歳、リングによって設立されたスウェーデン王立中央体操学校に入学し、2年間医療体操と教育体操を学び、優秀な成績で卒業した。ロンドン学校委員会に招かれ、女学校と小学校の体育主事となり、体操を普及する仕事を始めた。24年間イギリスにおけるスウェーデン体操の普及と、女子体育教師養成に全力を注いだ。

1885年、マダムはロンドンに、体操教師養成のハンプステッド体操専門学校を開設し、女子体操のスペシャリスト、体操教師の養成に取り組んだ。1886年、パー・オスターバーグと結婚。翌年、体操教師向けに『体操要覧』を出版し、解剖学・生理学・衛生学の知識を持った体操教師養成が必要となることを述べた。1895年、ハンプステッド体操専門学校をロンドン郊外のダートフォードへ移転し、寄宿制のバーグマン・オスターバーグ専門学校として再出発する。これがキングスフィールド・カレッジである。永井道明、トクヨが留学したのはこのダートフォードである。マダムは、よりよいスウェーデン体操を紹介すること、女子が体操教師に最適であることを証明すること、独立自営的なイギリスの女性に体操教師という職業が最適であることを認知させるために学校を設立した。マダムは、トクヨの体格がおよそ体操には向かないが、「只天才家との賛辞を呈する外に詞はない」と絶賛した。マダムは“トクヨが日本に帰ったらクキーンスフィールド専門学校を建てるように祈る。その時には尽力する”と常々口にしていた。トクヨは他の学校も視察しなければならないため、1年半でマダムの許を去る。マダムは“2年いなければならない”と主張したが、結局は許してくれた。

トクヨが帰国後、生徒に着せた体操服チューニックは、ハンプステッド体操専門学校時代に考案されたものであった。マダムは女性参政権の獲得を目指すフェミニズムの思想を持っていた。そのため女性の自由を妨げている服装についての改良に積極的であった。リングにしたがって、体育の根本原理を「身体全体の調和的発達」ととらえていた。寄宿舎生活を送る生徒たちの食物・空気・衣服・不正な身体の矯正に気を配った。足を強くし、胸を広げ、背筋を真っ直ぐにさせることで、か弱くて気力のない婦人を、強く、健康で、優雅な婦人に変えることができると確信していた。当時の婦人は、筋肉はやせこけ、悪い空気を吸い、少量のものしか食べず、成長を妨げるような衣服を身に着けて、座ってばかりいる生活をしていた。このような婦人を作り変え、幸せ

な生活を送らせる方法がスウェーデン体操の普及であり、マダムの理想を広げる女子体育教師の養成であった。

マダムの教育方針は厳しく、女性解放のために働くパイオニアとして全世界にひろがっていた。教育は学校生活、寄宿舎生活全般を通して行われた。女子の職業拡大の一方法ともとらえ、女性の地位向上のための努力であった。立派な仕事をする女性を社会に送り出す責任から、学校の規模は大きくしてはいけないと確信していた。修業期間の2年間に水準に達した者のみが免許状を得ることができた。水準に達しないものは達するまで学ぶことを要求された。教師陣も最高のスタッフをそろえ、社会に出て働いている卒業生のために「日曜コース」を開いて教育水準の維持に努めた。体育の技術だけでなく、広い教養を身に着けさせようと、時事問題を語り、スカンジナビア人の習慣やダンスについて語った。学外から識者を招き、芸術や旅行、彼らの経験などの話を聞かせた。

1888年、ロンドン学校委員会を辞任して、ハンプステッド体操専門学校の仕事に専念する。この時点で、イギリスで資格を持ったスウェーデン体操の教師は1,200人以上、スウェーデン体操を採用した女学校は300に達していた。1893年、アメリカ、シカゴでの「世界教育会議」に出席した。体操学校を訪問し、ボストンではすべての公立学校にスウェーデン体操が導入され、6万人の子供たちが訓練を受けていることを知るが、スウェーデン体操の4領域のうち、教育体操だけの実践であり、医療体操の側面が欠けていると感想を述べた。1915年6月、死亡する直前にバーグマン・オスターバーグ体操学校を国家へ寄贈した。“無一文で立った私は無一文で終わらなければならぬ”とトクヨに語った通りであった。それはトクヨがイギリス留学を終えて帰国した3ケ月後のことであった。マダムの方針を、トクヨは二階堂塾や日本女子体操専門学校においてことごとく実施した。

二階堂体操塾出身の著名人―人見絹枝―

人見絹枝（中央）
（『二階堂学園六十年誌』）

人見絹枝は大正13年4月、二階堂体操塾第3期生として入学した。後、1928（昭和3）年のアムステルダム・オリンピック女子陸上800mで銀メダルを獲得し、日本女性初のオリンピックメダリストとなった。

人見は明治40年元旦に岡山県で誕生した。子どものころから活発で、友人は女子よりも男子の方が多かった。学業優秀、特に国語が得意で文章や短歌の才能もあった。大正9年4月、難関の岡山県立岡山高等女学校（現岡山県立岡山操山高等学校）に入学。10年5月、岡山県庭球大会でペア優勝。「関西第一の前衛」と称えられた。12年11月、第2回岡山県女子体育大会において、走幅跳で4m67㎝の日本最高記録（非公認）を出した。卒業を前にして和気昌郎校長は、絹枝の競技者としての能力が埋もれてしまうのを惜しみ、二階堂体操塾への進学を進めた。絹枝の父は女子高等師範学校を、母は裁縫を習いに行くことを願い、人見本人は、女専の文科か女子高等師範学校の文科を希望していた。しかし、和気校長の熱意に負けて二階堂体操塾に進学した。

人見は、身長166㎝と当時としてはずばぬけた体格であった。人見はテニスの腕を磨きたかった。しかし、当時のトクヨはエリート意識を持つことを嫌い、競技選手を育成する気持ちがなく、好感を持っていなかった。そのため人見はつらい思いをした。13年10月、第3回岡山県女子体育大会が催されることになり、岡山県から人見に出場の要請が来た。人見は、トクヨに許可されないだろうと恐る恐る話してみると、意外にも「帰って大いにやってらっしゃい」という言葉が返ってきた。人見はその大会で三段跳10m33㎝の世界最高（非

公認）を記録した。トクヨは雑誌『ちから』3巻12号のグラビヤに人見が塾で体操する写真を6枚紹介した。その後も人見は50m走や三段跳で記録を出し、大活躍した。トクヨは、トップアスリートの養成が女子体育の発展に必要であると考えなおし、グラウンドを2倍に拡張するなど支援した。

人見は二階堂体操塾を卒業して、14年4月、京都市立第一高等女学校（現京都市立堀川高等学校）に月俸70円で就職した。しかし、1学期の終わりにトクヨから塾に戻ってきてほしいと要請され、塾長に代わって台湾の学校へ実技講習の講師として派遣された。帰国後は、研究生として迎えられ、塾の専門学校昇格に向けて準備を進めた。15年3月、昇格が認められた時は、トクヨと手を取り合って喜んだ。人見は、号令のかけ方が悪いとよく注意されたが、月給を受け取らず、年末年始にも帰省せず、グラウンドの整備をしたり、毎朝松原駅（現明大前駅）から学校に向かう道を掃除したり、高い身長を生かして体育館の屋根を修理したりしてトクヨに褒められた。トクヨは、非の打ちどころのない人見を学校に留めおきたかったが、人見は、女子陸上競技のパイオニアとしてさらなる飛躍を目指して、15年4月、大阪毎日新聞社に入社した。

1926（大正15）年8月、スウェーデンで行われた第2回国際女子競技大会に日本人としてただ一人参加し、走幅跳1位、立幅跳1位、円盤投2位、100ヤード走3位という結果を出し、個人総合1位、名誉賞を受賞する好成績を上げた。この大会は、まだオリンピックの陸上種目に女子の参加が認められていなかったため、フランスのアリス・ミリアが主催した大会であった。この大会で国際大会の事情を知った人見は、コーチの必要性や年間を通してトレーニングする重要性を、著書などを通して広く伝えた。昭和2年4月、谷三三五（さ さ ご）にコーチを依頼した。そして1928（昭和3）年のアムステルダム・オリンピック女子陸上800mで銀メダル獲得。日本女性初のオリンピックメダリストとなった。本命だった100mを準決勝で敗退し、「このままでは帰れない」と、それまで800mを公式の競技会で走ったことはなかったが挑戦した。1位と

なったドイツのリナ・ラトケとほぼ同時にゴールした後失神するほど競り合った。その後休む暇もなく立て続けに大会に出場したり、後輩選手を率いて国内外の大会に出場したり、またその遠征費用捻出に苦労したりした。トクヨは、昭和5年の国際女子競技大会への遠征費として1,000円を人見に送って支援している。昭和5年は半年の間に5つの大会が集中した。そうした多忙な競技生活の中で『最新女子陸上競技法』や『スパイクの跡』などの著作活動も行っている。

昭和6年3月、体調を崩して、5月、大阪帝国大学附属病院に入院し、乾酪性肺炎により同年8月、24歳の若さで他界した。50m、100m、走幅跳、立幅跳、走高跳、三段跳、砲丸投、円盤投など多くの陸上競技に出場し、非公認も含めて、数々の世界記録、日本記録の保持者となった。人見没後トクヨは、「スポーツが絹枝を殺したのではなく、絹枝がスポーツに死んだのです」（『婦人公論』 ウキペディア「二階堂トクヨ」より）という言葉を残している。また、プラハに人見絹枝の碑が建立されることになった時、トクヨは借金をしてまで寄付をしたという。

参考文献

『二階堂学園六十年誌』
二階堂清寿・戸倉ハル・二階堂真寿共著『二階堂トクヨ伝』
『日本体育大学八十年史』
『二階堂学園90年―学園は今―』
ウキペディア「二階堂トクヨ」

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書（35）
:『鳥取県公報』にみる鳥取県立高等学校の専攻科（9）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号は、前号に引き続き『鳥取県公報』（以下、『公報』）に掲載された授業料に関係する規則を検討する。今号では、1988（昭和 63）年に制定された鳥取県立高等学校授業料等徴収条例を検討する。

鳥取県立高等学校授業料等徴収条例は、1988（昭和 63）年 3 月 28 日の条例第 4 号として制定された。この制定にともない、県立学校授業料徴収条例は廃止されている。同条例は膨大なので、専攻科に関する箇所のみを以下に示すことにする。

鳥取県条例第四号

鳥取県県立高等学校授業料等徴収条例

（趣旨）第一条

（授業料等の徴収）第二条

（授業料等の額）

第三条 授業料、入学料及び入園料並びに入学選抜手数料の額は、次のとおりとする。

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">区分</td><td colspan="3">授業料</td></tr>
<tr><td>授業料（年額）</td><td>入学料又は入園料</td><td>入学選抜手数料</td></tr>
<tr><td rowspan="2">県立高等学校</td><td>全日制の課程</td><td colspan="3" rowspan="2">（略）</td></tr>
<tr><td>定時制の課程</td></tr>
</table>

	通信制の課程			
	専攻科	一〇三、二〇〇円	三、六〇〇円	一、七〇〇円
県立幼稚園		（略）		

（授業料の納入方法）

第四条

3 専攻科に係る授業料は、前条に定める額の二分の一に相当する額を、それぞれ第一学期分にあつては四月末日までに、第二学期分にあつては 九月十日までに納付しなければならない。ただし、当該納付期限後に入学又は復学をした場合の当該学期分の授業料は、その事実の生じた日の属する月の末日までに納付しなければならない。

（中途入学者等の授業料）第五条

（併修の場合の授業料）第六条

（授業料の減免）第七条

（既納の授業料等）第八条

（規則への委任）第九条

附 則

（施行期日）

1 この条例は、昭和六十三年四月一日から施行する。

（県立学校授業料徴収条例等の廃止）

2 次に掲げる条例は、廃止する。

一 県立学校授業料徴収条例（昭和二十二年十二月鳥取県条例第三十八号）

二　通信教育入学料徴収条例（昭和二十三年三月鳥取県条例第二十号）
三　県立学校入学選抜手数料徴収条例（昭和二十三年四月鳥取県条例第二十八号）
四　鳥取県通信教育受講料徴収条例（昭和二十三年六月鳥取県条例第三十号）
（県立学校授業料徴収条例の廃止に伴う経過措置）３
（通信教育入学料徴収条例の廃止に伴う経過措置）４
（昭和六三年度における入学料の額の特例）５

専攻科の入学選抜手数料は、それまでは鳥取県立高等学校専攻科入学者選抜実施要項の中で示されていた（印紙での納入が定められていた）が、この条例の制定にともない、ここで規定されることになった（規定された後も鳥取県立高等学校専攻科入学者選抜実施要項にも記載された）。なお、この条例の制定にともない廃止されることになった県立学校入学選抜手数料徴収条例には、専攻科に関する規定は存在していなかったので、条例上にきちんと位置づいたのはこれが最初ということになる。

第三条と第四条の規定を見る限り、半額ずつを 4 月と 9 月に納入するということなので、授業料こそ高額になったが、納入方法に変化はない。

この条例はその後に何度か改正されているが、専攻科に関わる改正は、専攻科の廃止にともなう関係箇所の削除を定めた 2013（平成 25）年 3 月 26 日の鳥取県条例第 28 号のみである。

（付記）本研究は科学研究費補助金（20K02435）の助成を受けたものである。

旧制灘中学の教育目標と生徒の活動（7）

冨岡（とみおか） 勝（まさる）（近畿大学）

第104号より、旧制灘中学校の教育目標や生徒の活動についての史料を紹介している。第107号からは、初代校長眞田範衛（さなだ・のりえ。1889年～1946年）の教育方針に関わる史料を紹介している。

前回は、眞田範衛が灘中学校赴任以前より唱歌・童謡の作詞活動に取り組んでおり、文部省高等小学唱歌に入選するほどの実力があったことをとりあげたが、本号では、、眞田範衛先生遺稿集刊行委員会編『初代校長眞田範衛の生涯と遺稿』（灘中学校・灘高等学校、1997年）に掲載された眞田の作詞による灘中学校の校歌と「生徒の歌」を紹介する。

須田珠生は、著書『校歌の誕生』（人文書院、2020年）のなかで、大正期が校歌の転換点であったとして、次のように述べている。

> 今日では校歌は一学校ごとに異なる歌として認識されているが、校歌という歌が学校で歌われるようになった一八九〇年代には、必ずしも校歌は学校固有の歌であるとは限らなかった。あらゆる学校でうたわれることを想定して作成された《卒業式》や《運動会》といった唱歌を各学校がそれぞれ自校で作成しないのと同様に、校歌についても、他校と同一の《校歌》をうたうことに違和感がなかったのである。（略）おおよそ、大正期を境として、その土地特有の地理的・歴史的環境や各々の学校が定めた指針である校訓や教育方針といった、その学校だけに通ずる内容を歌詞の構成要素として校歌にうたい込むことを学校が望むようになる。

以下の眞田作詞による校歌では、顧問・嘉納治五郎が示した校是「勢力善用」「自他共栄」を歌詞のなかで正面から取り上げている。

生徒歌についての研究は管見ではまだ少なく、生徒歌に関する明確な定義は見つけにくいが、儀式では校歌が主に歌われるのに対し、生徒歌は、応援歌・寮歌と同様、儀式以外の場面で歌われることが多かったと思われる。

眞田作詞の「生徒の歌」では、一番から四番で春夏秋冬における生徒の姿を歌っている。菟原（現在の兵庫県芦屋市および神戸市東灘区付近）に位置した灘中学校の生徒たちが、ちぬの海（大阪湾）、住吉神社、六甲山に囲まれながら、理想をもって学習と運動に生き生きと励む、眞田のイメージした灘中生活の理想像が詠み込まれていると考えられる。ちなみに、四番の「文化をほこる阪神のいらかの波を低く見て」の箇所は、旧制第一高等学校の「第十二回紀念祭東寮寮歌」（通称「嗚呼玉杯に花うけて」）の「栄華の巷低く見て」によく似ている。旧制高校の寮歌は、生徒歌のモデルとしても人気があったと思われる。

灘中学校校歌 案

一、 四海に輝く 我が日の国を、
担(にな)はん前途の 希望に燃えて、
理想を育(はぐく)む 男子(をのこ)の集(つどひ)
実力(ちから)を培(つちか)ふ 健児の結(むすび)
栄(はえ)あれ、灘中、あゝ我が母校。

二、精力善用 自他共栄の
校是(こうぜ)に心の鏡を磨き（て）、
学(まな)びて倦(う)まざる 男子(をのこ)の集(つどひ)。
努(つと)めて止まざる 健児の結(むすび)
栄(はえ)あれ、灘中、あゝ我が母校。

（昭、七、九、六脱）

生徒の歌（其二）

眞田範衞作詞

一　霞たなびく 野をこめて
菟原の里は 花ざかり
世は行楽の春なれど
智慧の林にあこがるゝ
我等紅顔七百の
輝く瞳君見ずや

二　新樹の緑色まして
み空に雲の峰湧けば
我は海の子 凪ぎ渡る
ちぬの浦波慕ひ来て
水を友なる日もすがら
渚に残る思かな。

三　住吉川原 秋たけて
意気こそあがれ 若人の
力の象徴 肉隆き
肌の汗に ほほゑめば
遠く河泉の山々は
うす紫に暮れて行く。

四　嶺の木枯吹き絶えて
雪清浄の六甲や
文化をほこる阪神の
いらかの波を低く見て
高きに立ちて嘯けば
生命ぞ更に新なる。

五　あゝなつかしき少年の
夢まどかなる彩衣
幾年こゝに重ね来て
つきぬ思ひの碑を
常盤の松の色深き
この丘の上に建てんかな。

（次号に続く）

体験的文献紹介(60)

― 大久保利謙博士・多賀秋五郎博士との邂逅（その2）―

神辺 靖光（ニューズレター同人）

私が国士舘大学に移った翌年春から多賀秋五郎先生が同大学の専任教授になられた。尾形先生の推挽による。その年の3月某日、多賀先生の奥様が突然、拙宅にこられてご挨拶をされた。そのとき、頗る上等の春慶塗漆器一式を頂戴した。飛騨春慶の名を以て知られる名品である。学界での上下関係からみて、このように丁重なご挨拶は試されているようで薄気味悪いものがあった。

多賀先生は岐阜県吉城郡古川町のお生れ、東京文理科大学文学部史学科を卒業され、次いで同大学の研究科で教育史を研究、中央大学助教授をへて教授に就任された。昭和37年、「宗譜の研究」により文学博士の学位を受け、同時に日本学術会議の推薦により「宗譜の研究」に対し毎日学術賞が贈られ、53年には東洋教育史研究上の業績が顕著であるとして紫綬褒章が授与されたのである。このような輝かしい経歴がある多賀秋五郎先生が国士舘大学に来られて私と同室の人文学部教育学研究室に勤務されることになったのである。

新学期が始った時のこと、大久保先生から電話があって、多賀先生が来て教育史を担当する者が増えたから私（大久保）を止めさせてくれ、日本史の講義に専念したいと言われた。怒った風でもなく淡々としたいつもの口調であったが、私の胸にはなにか引っかかるものがあった。早速手配して大久保先生担当の教育史は神辺が受け継いだ。新任の多賀先生は先生独自の教育史をなさるであろう。

このことを多賀先生に話すと先生はご自分が研究史料を持ち込んだ時、大久保先生の書類棚が多少空いていたのでそこへ多賀史料を置いたとのこと。

或はそれが大久保先生の逆鱗(げきりん)に触れたのかもしれないと思った。温厚にみえるが、人情の機微(きび)に触れる政治社会の変動を微細に書き分ける文章の達人である。敏感な神経の持ち主なのであろう。

大久保先生との会話はその後も国会図書館や国立公文書館での交流で続いたが、国士舘大学では専ら多賀秋五郎先生参加協力のもとに活発な学生への学習研究指導が始まった。どの大学でも新学期にはオリエンテーションをおこなう。新入生には大学生活のおくり方、卒業学年生には卒業論文のつくり方を指導する。わが国士舘の教育学専攻もこれをやろうということで計画をすすめたところ、多賀先生が自らオリエンテーションの諸役を買って出て適切な指導助言を行ってくれた。高みの見物を決め込んで皮肉(ひにく)をぬかす老獪(ろうかい)と違う実践的な教育者をそこに見て私の多賀先生観は一気に尊敬に変ったのであった。

多賀先生の研究業績について前に「宗譜の研究」に触れたが、宗譜とは古来、中国の血縁統合体である宗族の間で作られた系譜録を言う。多賀先生はこれらの宗譜を過去、現在にわたって広く調査し、宗族の変遷と宗譜の変遷を結びつけた研究をして中国史研究に多大の貢献をした。その功績により前(さき)に毎日学術賞と紫綬褒章を受けられたが、さらに昭和60年3月には学士院賞が授与されたのである。

中央大学教授として勤務されてからは専ら教育史担当者として内外古今の教育史研究に勤められた。教育史学会紀要に先生の論文を多く見ることができるが、中央大学在勤中の教育史著述には以下の10種がある。『教育史概説』(昭和26年)、『西洋教育史』(昭和28年)、『日本教育史』(昭和28年)、『中国教育史』(昭和30年)、『近代日本教育史』(昭和31年)、『近代学校の歴史』(昭和35年)、『東洋教育史』(昭和38年)、『学校教育論』(昭和42年)、『道徳と教育』(昭和44年)、『学校の歴史』(昭和44年)。

旧来、研究されてきた日本教育史、西洋教育史のほか、東洋教育史、中国教育史に及び、ここで一転して〝近代学校の歴史〟を概観して現代の学校問題、日本の教育を見究めようとする。この方式は私がかねてより行(おこな)ってきた日本教育史講義と軌を一にするものであった。

私は東京文化高校の主事を勤めていた頃から請われて早稲田大学第一文学部、第二文学部（夜間）の教育学専攻課程で日本教育史を講義していたが、師・尾形先生に呪縛(じゅばく)されて先生著述の『日本教育通史』を使用させられていた。本書は先生の信念通り、学校教育、社会教育、家庭教育の三分野を各時代別に記述し、各事項別に一次史料を明記し、それに関する後世の研究書を掲載するという手堅い研究書的教科書である。勘案するに教育史・教育学専攻の大学院生必読の教科書であるが、はじめて教育学に接する学部学生の入門書にしては難解すぎる。よって私は文学部での講義では尾形教科書は机上に置かせて私の講義に登場する学校名称や関連する事項だけを指摘(してき)するに止めた。さらに古代では律令制に連なる大学寮や国学、また貴族たちの直曹(じきそう)、別曹(べっそう)、注目すべき空海の綜芸種智院(しゅげいしゅちいん)を、また中世では特殊な金沢文庫と足利学校をとり上げたが、あとは専ら五山をはじめ寺院における宋学や各宗派で行われた登山(とざん)（武家の子どもを預って読み書きを教えること）やわずかながらキリシタン学校のことを講述した。近世になると講述内容は俄然増大する。まず徳川将軍家の学問所・昌平黌からはじまって甲府その他直轄地の学校、全国に展開した藩校、寺子屋、郷校。これらについてはすでに多くの先覚が著述しているから、その優れてかつわかり易い名著として藩校については笠井助治(すけはる)の『近世藩校の綜合的研究』と石川謙の『寺子屋』（日本歴史新書）をあげた（ともに昭和35年刊）。

私の日本教育史講義は以上の如く、学校の祖型からはじまり明治年間に近代学校制度に構築され、以後、時代の政治経済社会の変遷によって変遷するという構造になるが、実際には古代中世近世に全授業の三分の一を費し、明治大正昭和戦前期に三分の二を当てると言うものであった。尾形先生

の『日本教育通史』を使用することが厳命だったから学生の机上に置かせ、講義に関連する頁を示すに止めたのである。

私は若年の頃から東京の私立女子高、私立女子短大の経営にかかわってきたので、学生生徒の進学動向には常に注意を払ってきた。朝鮮戦争の勃発で漁夫の利を得た日本経済が活発に働いて頂点に達したのが昭和39年の東京オリンピックと45年の大阪万博であったと思われるが、この時期、高校への進学率が90%に達し、大学への進学が急上昇していたのである。しかるにこの時期、象牙の塔と畏敬された東大医学部のストライキで安田講堂が占拠され、また日本一のマンモス大学・日大の本拠地、御茶ノ水神田市街が学生に占領されるという大事件がおこった。これは忽ち全国の大学に及び、さらに高校生の試験・卒業式ボイコットに飛び火したのである。豊かな日本になにが不満だ!! 最高学府や有力高校に学んでなぜ反逆するのか!! 戦時中の、また戦後の学生生活で苦難の道を歩んだ私たち世代の者には理解し難いことであった。しかしこの豊かで恵まれた身分、状態がたまらなく嫌であったのである。贅沢と言えば贅沢な不満であるが、それが未熟な若者の気概でもあった。

このような理解しがたい学校騒動は高校・大学への進学者の急増からおこったことである。そしてその背景には高校の増設、大学の学部学科の多様化があるが、知られていないのが各種学校の格上げ増設である。昭和30年代から40年代にかけて私は私学教育研究所の研究員だったので市ヶ谷の私学会館に出向く機会が多かった。そこで私は各種学校の校長教頭クラスから質問責めに会った。当時は東京オリンピックに向けて交通機関、通信機関が発達し、神奈川県西部、埼玉県中部、千葉県北部は東京首都圏に入るという想定で諸学校配置が考えられた時でもあった。戦前からあった女子の洋裁学校や調理学校が新時代の服装・服飾・栄養・健康を求めて女子大学や短大になるように目論んだのである。日本経済の絶頂期にそれらは成就したが、壮大に成功した新宿の文化服装学院について紹介しよう。昭和のはじ

め並木裁縫塾であったものが戦後、大沼厚理事長のもと大学・大学院を併設する各種学校・文化服装学院になった。大学、大学院は規準通りの授業をしたが、各種学校は従来の裁縫学校に独特の工夫を加えてアメリカ風のモダンな洋裁に大転換し忽ち流行の先端を走るようになった。服装だけでなく家具・装飾に至るまでアメリカナイズさせ中流日本人主婦の支持を得た。よって月刊誌『装苑』を刊行しアメリカ中流家庭の家庭生活ぶりを写真を駆使して紹介し、服装のみならず、家庭全体を改善する啓蒙雑誌の使命を負わせた。同時に各種学校卒業生を帰郷させ、文化服装学院流の洋裁学校を開校させて家庭改善ブームを起したのである。

文化服装学院は大成功をおさめた側であるが戦前からあったフランス流の洋裁学校や栄養学校もそれぞれの理念のもと改革をおこない新しい女子大、短大、各種学校に発展したのである。

戦前、農村・漁村・山林地帯の村々には若者組があって親方、先輩から村々のしつけを受けたが野蛮な行為が多かったので大正の頃から青年団になり青年学校（夜学）になったが戦後の改革でこれらは6・3・3制の学校体系に組み込まれた。産業界は同業組合や会社直営の技術修得予備学校をつくったが、日本の代表的自動車メーカートヨタが企業内自動車修理学校をつくるに及んで日本は前人未到の職人養成学校の王者になったのである。一方、有名大学への進学熱は冷めやらず、受験予備校は大繁盛。かくして日本の少青年はこの世に生を受けるや否や保育園・幼稚園から間断なく小中高大学へと進学するようになった。その間、予備校その他の準学校で学ぶ者もいる。こうして一人前の社会人になってゆくので、社会教育・家庭教育の分野は極く狭（せま）くなり、なくなったと言っても過言ではないだろう。私の日本教育史講義が、古代から近世までの学校雛形のような施設のみをとり上げ、明治以後の学校の普及発達に力をそそいだのは現代の学校全盛のメカニズムを究明したかったからである。

ある時、多賀先生から新しく藩学史研究会をつくるから入会するように言われた。予定された私学関係の会場に行くと会長・多賀先生を中心に学習院の林友春氏、元名古屋大学の結城陸郎氏はじめ東洋教育史幹部が幹事役になり、別に上智大学の尾形利夫、早大教育学部の山下武教授が控えていた。私は予(あらかじ)め言われていたので幕末維新期の藩校が後年の中学校教則を予測できるような教則をつくっていた実例を発表して責(せめ)を果した。こうして私は多賀先生が主催する藩学史研究会の一員になったのである。

参考文献

多賀博士記念論文集『アジアの教育と社会』『アジアの教育と文化』

＜書 評＞ 井上義和･加藤善子 編著

『深志の自治――地方公立伝統校の危機と挑戦』

津田 壮章(京都大学大学院人間･環境学研究科教務補佐員)

本書は長野県松本深志高等学校（以下、松本深志高校とする）の伝統である「深志の自治」について、学問分野の異なる研究者が様々なアプローチ方法でその危機と挑戦を問う共同研究書である。長野県教育委員会が「『未来の学校』として先進的･先端的な研究開発に取り組む実践校」を指定する「未来の学校」プロジェクトで、松本深志高校が公募した「『未来の学校』に関連した研究者との共同研究」に採択された６プロジェクトの内、３つのプロジェクトチームの共同研究成果として出版された経緯をもつ。「未来の学校」プロジェクトでは県内 6 校が実践校となっており、「卓越した探求的な学び」や「国際的な教育プログラム」、「高度な産業教育を推進」等のテーマが並ぶ中、松本深志高校は「自治の追求により骨太のリーダーを育成する高校」と位置付けられている。

主な執筆者は松本深志高校を卒業した《中の人》7 名と、他校を卒業した《外の人》4 名であり、それぞれに「見える世界を組み合わせることで、複眼的に対象を浮かび上がらせる」（6 頁）工夫がなされている。

本書は３部構成となっている。「第 1 部（小説･映像編）深志生がとらえた自治の現在」では、松本深志高校の現役生が制作した映像やショートストーリーをもとに、「深志の自治」に関わる制度や取り組みが説明される。松本深志高校には校則や制服が無く、「深志の自治」を代表する組織や制度がどういった機能を有していて、それに参加する当事者は何を思っているのかを知ることができる。

松本深志高校では、新入生を対象に校歌や応援歌の「正しい」歌唱方法や身体動作を仕込む応援練習がおこなわれる。応援練習を主催する団体である應援團管理委員會は、正装が学ラン、学帽または鉢巻き、マント、高下駄であり、バンカラを体現する服装となっている。文化祭であるとんぼ祭は、生

徒手帳に「すべてが我々生徒の手でおこなわれる」（276 頁）と書かれており、舞台装置設置委員会等の裏方を生徒が担う姿が描かれる。この他にも、全校生へ問題提起や決起を促す意見表明文である檄文を校舎の昇降口に貼り出すことができる。こうした既に伝統化された行事や制度だけでなく、2000 年頃から始まった生徒会予算の使途を各部の代表者が集まって議論する折衝会や、2017 年から設置された生徒・職員・地域住民の常設協議機関である鼎談深志といった、「深志の自治」を前提とする新たな行事を生み出すことで、「深志の自治」を更新していく当事者の姿が描かれる。

「第 2 部（解説編）深志の自治とは何か」では、第 1 部で現役生の視点から紹介された事例を中心に、研究者の視点で解説が加えられる。第 2 章では卒業生へのアンケート調査結果から自治に対する世代間の認識の変容が示される。第 3 章では前身校である松本中学校の 2 人の校長と松本深志高校第 2 代校長である岡田甫の学校運営をヒントに、伝統としての「深志の自治」が創造される歴史が描かれる。

第 4 章では、《中の人》である編者の井上義和の視点で、応援練習やとんぼ祭が自治を担う力を養成する隠れたカリキュラムであると位置づけられる。そして、これら行事は新入生が「深志の自治の担い手として生まれ変わる」（154 頁）通過儀礼となる。文化祭であるとんぼ祭については、「教師の手を借りずに、自分たちの手でやり遂げる。そして、自分たちの手でやり遂げようとする生徒を、教師はつかず離れず見守ってきた。とんぼ祭を通じて、深志の自治は試され、鍛えられ、新しい命が吹き込まれる」（154 頁）として、通過儀礼の集大成であるとする。

第 5 章、第 6 章では、折衝会やとんぼ祭で、黒子として「深志の自治」を支える教師による、「教師の見えざる手」が機能する事例が《外の人》である加藤善子らの視点で考察される。折衝会では、「生徒が自分たちで運営するが、試練はその過程に組み込まれていて、生徒はそれを乗り越える経験をする。生徒が自分で達成する経験をするように、教師が伴走するプロジェクトになっている」（172 頁）と、教師の役割を示している。卒業生かつ現役教師への聞き取りから、「自分たちは、教師たちがつくった仕掛けの中で伸び伸びと

過ごしていた。その仕掛けをつくることが教育の醍醐味だと思うし、生徒がそのことを知る必要はない。しかし、教師が本当に何もしていないように見えるのも良くない」（182 頁）という危機感を紹介したうえで、「この仕組みを肌で感じ取り、息をするように自然体で実践する教師が少なくなれば、継承されなくなってしまう」（182-183 頁）と指摘する。同じ行事や制度を考察していても、《中の人》である井上と《外の人》である加藤の視点の違いが興味深い。

「第 3 部（課題編）伝統の危機と未来」では、「深志の自治」の課題と将来の展望を検討する論考が集まっている。第 8 章で加藤は、「教師の見えざる手」について《外の人》から見た課題を示している。その 1 つとして、1922 年に作られてから現在まで歌われ続ける校歌について、歌詞に男子生徒しか存在しないことが挙げられる。これまで、歌詞に問題意識をもつ生徒はいたものの、歌詞の変更を求める生徒会での議論や檄文は確認できなかったとして、教師も問題に気づかず、「教師の見えざる手」のないところの存在を指摘する。

第 10 章では、松本深志高校へどういった生徒が入学し、どういった進路をとるのかという自治と受験との関係がテーマとなる。その中でも、現役教師が保護者の傾向について、「自治に関心を持たれて深志を選ぶ方は、正直なところ少ないと思います。ただ、進学実績を見て深志に入ってみたら、自治活動が盛んで、結果として、すっかり染まって深志生として出ていく。そういう意味で『自治で身につける力』は深志の付加価値ですが、『勉強で身につける力』と比べると保護者には伝わりにくい」（238-239 頁）と述べるように、保護者には高校受験で松本深志高校を選ぶ理由として自治が重視されているわけではないことが示される。

本書では、これら「深志の自治」に関連する伝統行事や学校文化を「隠れ資産」と位置付ける。《中の人》である井上は大事なこととして、「地方公立伝統校の教育実践のなかに埋もれている『隠れ資産』に気づき、一緒に掘り起こして、その価値を吟味していくこと。そして何より、その学校の生徒と教師たち自身がその資産を大切に手入れしながら未来に継承していくことである。

もしかしたら、資産の本質はバンカラにはないかもしれないのだ」（5 頁）と述べる。このように、派手な見た目や目立つ伝統行事が注目されがちであるが、本質はそこではない可能性が指摘される。

《外の人》である加藤は当初、「なぜあの恐ろしい、強制参加の応援練習が自治なのか、さっぱりわからない」（279～280 頁）として、《中の人》に見えている世界が《外の人》には全くわからなかったとする。そのうえで、「文化とは、こういうものなのではないだろうか。その中で育った人たちにとっては至極当たり前のもので、言葉にする必要などない。だが、それは異文化で育った人には全くわからない。最初に接した時には、怒りにも似たフラストレーションが生まれる。それが、対話を困難にし、共通理解を作るために必要な、協力や努力を妨げる」（280 頁）と指摘する。ここに「隠れ資産」が掘り起こされ、資産として継承されるためのヒントがあるのではないだろうか。

本書の特長の一つが、生徒の取り組みを丁寧に描き出し、折衝会や鼎談深志といった「深志の自治」の更新過程を考察することである。松本深志高校のような独自文化に育てられた経験があると、ついノスタルジーに浸りたくなる衝動にかられることもあるだろう。しかし、学校文化や自治は現在進行形で積み重ね、発展させるものであることを忘れてはならない。松本深志高校の行事からは、「深志の自治」を維持・発展させる現場の並々ならぬ努力がうかがえる。本書が出版される経緯をみても、「深志の自治」を前面に押し出した研究の公募をしたうえで外部の研究者を招き入れている。こうした学校側にとっては負担も大きい企画を受け入れた点で、教師の「深志の自治」に対する熱意を感じることができる。

自治や校風は、それが伝統であったとしても、決してゆるぎないものではない。「隠れ資産」が隠れたまま消失することや、現代の学校運営や学力向上のためには邪魔者扱いされる可能性もある。教師側に自治を尊重する意識が薄くなれば、また、生徒側に自治を維持する能力や意思が無ければ、「教師の見えざる手」は容易にパターナリズムへと転化する可能性がある。

学校での自治を維持・発展させるためには、まず自治があり、日々自治を

行使することが大事である。何か大きな目的のために自治を利用する発想では、その自治はすぐに潰えてしまうだろう。例えば、進学率向上、受験生の人気向上、学校の特色強化といった、教育行政や教育現場の目的が先にあるならば、自治はその手段として利用されるか、邪魔な存在として扱われかねない。

本書で紹介される取り組みからは、生徒や教師が自治を日々行使する努力が見てとれる。こうした日々の積み重ねが、「深志の自治」を更新しながら脈々と受け継がれている背景にある重要な要素だといえる。一方で、これは言いがかりになるかもしれないが、本書では松本深志高校についてきれいにまとめられすぎてはいないだろうか。例えば、自治を隠れ蓑にした怠惰の自由を謳歌した層はいなかったか。先人の努力を知ろうともせず、成果のみを得るフリーライダーはいなかったか。無気力・無関心・無責任の三無主義はまん延しなかったか。卒業生へのアンケート調査を分析した第 2 章でシラケ世代等の特徴については触れられていたが、こうした人々の考察が自治にとって不要とは思えない。「深志の自治」に意識的な層や熱心に活動する層ではない「普通の生徒」も含めて松本深志高校であり、「深志の自治」であるはずだ。

校風としての自治や自由は、一見、無関心に見える層にも浸透するものではないだろうか。卒業から長い月日を経て、ふとしたタイミングで表出する可能性もある。こうした学校の価値は、中にいる間は気づかず、卒業してから気づくものだ。「変な学校だった」、「面白い学校だった」、そうした安易な言葉で片づけられてしまうかもしれないが、ふと振り返ってその価値をかみしめることができる時がくるはずだ。本書で示される事例からは、一見、理解不可能なものであっても、安易に《外の人》の常識を用いて短期的な評価を下すべきでないことが理解できる。一方で、《中の人》が《外の人》の視線に自覚的でなければ、社会の異物として安易な攻撃対象とされかねないリスクもある。

最後に、松本深志高校とは異なるが、自由な校風を重視していた公立伝統校[1]を卒業した者として、本書のような挑戦的書籍が出版されることを大変喜ばしく思う。それと同時に、既に自由な校風の大半を廃止した自身の出

身校にこうした可能性を見出せなかったことへの悔しさもある。井上が、「いくら学校が伸び伸びできる理想空間でも、『与えられた』自由・自治を謳歌するだけだと、学校の外で、不自由で抑圧的な現実に立ち向かえません。しかし、だからといって、学校が『不自由で抑圧的な現実』の縮図でいいわけがありません。大事なのは、自分たちで粘り強く試行錯誤しながら自由・自治を『勝ち取る』『行使する』という日々の実践の積み重ね」（269-270 頁）だと述べるように、日々の積み重ねを怠った伝統校は、その伝統を維持できない事態に陥りかねないのだ。

「深志の自治」にも課題があるはずだ。例えば、檄文は日常的に貼りだされているだろうか。表現の自由はそれを行使する人がいなくなれば、土壌が簡単に揺らいでしまう。教師や保護者等の学校関係者が、表現の自由を行使可能な場所が学内にあること自体の価値を常に理解しているとは思わない方がいい。日々の積み重ね以上に有効な方法はなく、檄文の掲示が少なければ需要が無いと判断される可能性もあるだろう。

以上、蛇足となったが、本書を読めば松本深志高校の「深志の自治」のもつ魅力と将来性を実感することができるはずだ。さらに、本書は広く学校の在り方を議論する土台としても最良の一冊といえよう。近年、ブラック校則の改正が話題になることが多い。管理教育を体現するような事例に社会的圧力が加わり、事態が改善することを否定はしない。しかし、目立つ過去の遺物を攻撃するだけで終わってはいないか。継続的な議論の場は維持されているか。学校現場には対処療法で終わらない自治が必要ではないか。「深志の自治」には、一つのモデルとして有用であるだけにとどまらない、学校と自治に関する議論を開く可能性に満ちている。

（信濃毎日新聞社、2023 年 6 月刊行、286 頁、1,900 円+税）

1）詳細は下記を参照。津田壮章「自由な校風という教育実践――京都府立鴨沂高等学校の学校行事『仰げば尊し』から」『人間・環境学』第 29 巻、2020 年、135-151 頁。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

『東京新聞』の地域情報（山手）欄をみていたら、江戸川区郷土資料室で三月一〇日まで開催されている、企画展「江戸川の漁　海と川と魚と貝と」（観覧無料）が紹介されていました。地元地域での漁の暮らしぶりやその歴史を、初公開資料も含みながら、関係する道具（アサリをとる道具、ノリ養殖の道具、ウナギ漁のわななど）や写真パネルで展示し、海や川からの自然の恵みをたくさんもらっていた江戸川の暮らしを知ってほしい・・と、森田聖子学芸員が強調しています。（谷本）

高生研（全国高校生活指導研究協議会）編集・発行の『高校生活指導』第２１７号（2024年3月１日発行）に、「プロジェクトでわくわくするとき」という特集が組まれていて、特集の冒頭に次のように書かれていた。〝かつて、里見実*は「教育は『プラン』ではなく、『プロジェクト』なのだ。『プラン』は指導者に既定されたゴールに生徒を導こうとするものだが、『プロジェクト』は元々『（身を）投げ出す』という意味を持ち、指導者も生徒もたどり着く先はわからない現実を共に探究しながら、わくわくする冒険的要素を孕んでいる」と語りました〟。ただし、指導者が何もしないときに『プロジェクト』が成立するのだろうか？ この特集では、〝型が先行するプロジェクト学習に陥らずに当事者が「主体」となるには、どのような教師や生徒による働きかけや対話があったのか」という観点から記事が書かれているようだ。大学の授業について振り返る際にも重要な観点だと感じた。（冨岡）

* 里見実（1936-2022）は教育社会学者。パウロ・フレイレの著作の翻訳者としても活躍した。

会員消息

PCやスマホの長時間使用の影響なのか、はたまた歳相応の老眼なのか、本人的には詳しい事情はよく分かりませんが。新聞や雑誌などの文字を読むのに、少し苦労していたところ、色付きルーペという文具を入手して使用してみたら、なんとも使い勝手がよくて重宝しています。もちろん、移動・外出先などでも持ち運びしやすいので、色付きルーペはなかなか便利なものでありますね。ただ、とっさに個別の対象物を拡大してみる際などには、愛用のスマホにある拡大鏡も使ってみたら、よくみえて素晴らしい・・と感じました。（谷本）

この度、拙稿が『日本生涯教育学会年報』等に掲載されましたので、誠に勝手ながら紹介いたします。

『日本生涯教育学会年報』第44号に拙稿「生涯学習への発展を目指した通信制高校における取り組み－博物館を活用した学びを手掛かりに－」が掲載されました。通信制高校の教育システム、在籍する生徒の特徴についてまとめたうえで、生涯学習への発展を目指した博物館活用について整理・提案しました。

『関西生涯教育研究論叢』第3号には、拙稿「通信制高校における地域資源を活かしたキャンパス交流の一考察（1）」を掲載していただきました。郵便局が行う「2023年度 手紙の書き方体験授業」を活用し、クラーク記念国際高等学校姫路キャンパスと芦屋キャンパスの交流を目指しました。次年度も継続して実施する予定です。

『リカレント研究論集』第4号には、拙稿「博物館機能の疑似体験を通じて資料に込められた思いを読み解く実践」を掲載していただきました。軍事郵便を題材に、博物館が行う「調査研究・展示・教育普及」などを疑似体験することで、「ミュージアム・リテラシーの涵養」や「資料に込められた思いを読み解く」ことを目指しました。

お時間のある時に、ご笑覧いただけますと幸いです。（八田）

先日、韓国38度線のDMZ（ DeMilitarized Zone 非武装地帯）ツアーに行ってきました。北朝鮮が韓国に攻め入るために掘ったとされる第3トンネルにも入りました。観光地のような感もしましたが、やはり南北間の問題を考えるきっかけとなりました。朝鮮半島の歴史をあらためて勉強し直そうと思います。（山本剛）

突然のご報告となってしまいますが、この度、2024年度4月より、群馬県の高崎商科大学に着任致しました。実は自分は、生まれたのは群馬県でして、縁を感じております。あら

ゆることが初めてとなりますが、まずは、業務などに慣れることができるように努力したいと思います。（雨宮）

津田壮章さんが『深志の自治』についての詳細な書評を投稿してくださいました。編集世話人の谷本さん・冨岡ともに、このように同人が執筆した著書・論文に書評を投稿いただけるというのは、とても有り難いことだと思いました。津田さん、感謝いたします。

史跡・足利学校（栃木県足利市）を初めて見学してきましたので、有名な「学校門」などを撮影しました。フランシスコ・ザビエルによって「日本国中最も大にして最も有名なる坂東の大学」と伝えられたことなどで広く知られる足利学校ですが、秀吉の時代にはやや冷遇され、家康からは手厚く保護され、明治期には足利学校跡の東半分に洋風建築の小学校校舎が新築される状況だったりしたそうです。そして1990年に大掛かりな復原工事（江戸時代中期の姿に復原）などの結果、現在の史跡の姿になったようです。保存方針の変遷自体が忘却と再発見の歴史であったことを知りました。やはり、現地に行ってその歴史を問うことは興味深いと思いました。

短評・文献紹介でとりあげた高生研の全国大会が、2024年8月2日から8月4日に、大阪（大阪商業大学）で開催されます。詳細は、5月以降に高生研のWebサイト<https://kouseiken.jp/>で公表されるそうです。この高生研の大会は、実践報告を聞くだけでなく、参加者同士が少人数グループで時間をかけて報告について深めていくスタイルです。勤務先のある大阪で開催されるので、私も久しぶりに参加してみたいと考えています。

次ページに4月から京都市学校歴史博物館で開催される企画展「春らんまん　京の学校に咲く花々の絵」のポスターを紹介いたします。詳細は、http://kyo-gakurehaku.jp/exhibition/R6/060404/index.htmlをご覧ください。（冨岡）

京都市学校歴史博物館
Kyoto Municipal Museum of School History

令和6年度 企画展

春らんまん 京の学校に咲く花々の絵

Spring in Full Bloom
— Flower Paintings Gracefully Colored Schools in Kyoto

竹内栖鳳「虞美人草」（大正９年頃 学校歴史博物館蔵）

令和6年
4月4日(木)～6月16日(日)

開館時間 ９時～17時（入館は16時30分まで）
休館日 毎週水曜日（祝日の場合は翌平日）
入館料 大人 400（320）円　小・中・高生 150（120）円
※（　）は20名以上の団体料金、京都市内の小・中学生は土曜日・日曜日入館無料

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。